

フツヌシ神話と物部氏

村山直子

「キーワード ①フツヌシ ②物部氏 ③香取神宮 ④玉作 ⑤神原神社」

はじめに

高天原より最後の使者として派遣されて、葦原の中つ国を平定した神には、文献によって食い違いが認められる。『古事記』ではタケミカヅチとアメノトリフネが、『日本書紀』ではタケミカヅチとフツヌシが、『出雲国造神賀詞』ではフツヌシと出雲国造の祖神アメノヒナトリがその任にあたっている。これらを総合して見ると、主としてはたらしきのあった神はタケミカヅチとフツヌシのようだが、この二神は従来中臣氏の氏神とされている。そのため、この神話は一見中臣氏の功績が述べられているかのようである。しかし一方

で、『古事記』『日本書紀』の神武天皇東征の条によれば、熊野において夢の託宣を得た高倉下という者が、葦原の中つ国平定の際にタケミカヅチにより使用された剣としてフツノミタマを神武天皇に奉っている。高倉下は物部氏と関係の深い人物であり、フツノミタマは物部氏が氏神として代々、奉じていた奈良県天理市の石上神宮の御神体である布都御魂剣を指す。これらから、葦原の中つ国平定には、中臣氏と物部氏の功績が重なっているようにも思える。しかし、中臣氏の氏神とされているフツヌシを検討すると、もとは物部氏との関係が深い神であつたと思われる点がいくつか挙げられるのである。

フツヌシが物部氏と関係があるとする考えはすでに多くの研究者によって認められているが、フツヌシがフツノミタマを神格化したものであるという観点から述べられることが多い。しかし、フツヌシ・フツノミタマそれぞれを祭る氏族が中臣氏、物部氏と異なっていることから、フツヌシ・フツノミタマを簡単に結び付ける訳には行かず、慎重に考えるべきだと思われる。ここでは物部氏の性格及びフツヌシとの関係を明らかにするとともに、葦原の中つ国平定の神話の原点を探りたい。

1. 物部氏の職掌

物部氏は大和朝廷において、軍事のほか神事にも携わる有力な大連の家柄であつた。物部氏の祖神ニギハヤヒは天神の子として神武天皇に先立ち大和に天降っているが、『先代旧事本紀』天孫本紀によれば、この時ニギハヤヒは天祖により天璽瑞宝という十種の神宝を授けられ、天磐船に乗って河内国嵯峨に降っており、

その神宝は石上神宮に納められている。また、天璽瑞宝について、天神本紀には以下のように記されている。

天神御祖詔。授天璽瑞宝十種。謂。羸都鏡一。辺都鏡一。八握劔一。生玉一。死反玉一。足玉一。道反玉一。蛇比礼一。蜂比礼一。品物比礼一是也。天神御祖教詔曰。若有痛处者。令玆十宝謂一二三四五六七八九十而布瑠部。由良由良止布瑠部。如此為之者。死人反生矣。是則所謂布瑠之言本矣。

このように、天璽瑞宝は鎮魂の呪具であり、物部氏は鎮魂の宗教儀礼を司っていた。この他にも物部氏が神事に携わっていたことを示す記述が、『日本書紀』にいくつか見られる。まず、崇神紀七年八月及び十一月の条には、以下の記述が見られる。

・(八月)乃ち物部連の祖伊香色雄をして、神班物者とせむと卜ふに、吉し。

・十一月の丁卯の朔己卯に、伊香色雄に命せて、物部の八十平瓮を以て、祭神之物と作さしむ。

また、六十年七月には物部氏の一族である矢田部造の祖である武諸隅が、神宝を見たいという天皇の命により出雲へ派遣され、天皇に神宝を奉っている。

六十年の秋七月の丙申の朔己酉に、群臣に詔して曰はく、「武日照命(一に云はく、武夷鳥といふ。又云はく、天夷鳥といふ。)の、天より將ち来れる神宝を、出雲大神の宮に蔵む。是を見欲し」とのたまふ。則ち矢田部造の遠祖武諸隅(一書に云はく、一名は大母隅といふ。)を遣して献らしむ。

更に、垂仁紀には物部十千根という人物が登場するが、彼はまず、二十五年二月に神祇の祭りを怠らないよう垂仁天皇より命じられ、二十六年八月には、やはり天皇の命により出雲の神宝検校に赴いている。また、八十七年二月に、十千根は石上神宮の神宝を授けられ、これを管理している。

一方軍事面についての記述も見られ、殊に雄略紀に多い。七年八月には、吉備の豪族吉備下道臣前津屋が反逆の意志を持つていたとの報告を聞いた天皇が、「物部の兵士三十人を遣して、前津屋并せて族七十人を誅殺さしむ。」と記されている。また、十三年と十八年の条にそれぞれ以下の記述が見られる。

・十三年の春三月に、狭穗彦が玄孫齒田根命、竊に采女山辺小嶋子を奸せり。天皇、聞しめして、齒田根命を以て、物部目大連に収付けて、責讓はしめたまふ。

・十八年の秋八月の己亥の朔戊申に、物部菟代宿禰・物部目連を遣して、伊勢の朝日郎を伐たしめたまふ。

また、継体天皇の御代には、筑紫国造磐井の乱に際し、物部麤鹿火大連が大將軍として派遣され、乱を平定している。

直木孝次郎氏は、物部の「物」は武器の物の具の意味もあるが、物の化の「物」、つまり精霊や靈魂をも意味しており、このように軍事的氏族でありながら祭祀をも掌るのは、古代は戦いの前に戦勝を神に祈る風習があつたため、軍の指揮者は同時に司祭となつて神を祭ることもあるために、両者の性格が結び付くのは自然な事であるとされた。^(注1) 以上のように、物部氏は軍事的・宗教的性格を合わせ持つ氏族であつたと考えられる。

2. 物部氏と鹿島神宮・香取神宮の関係について

タケミカツチとフツヌシは、それぞれ茨城県の鹿島神宮と千葉県の香取神宮の祭神として祀られており、共に中臣氏の氏神とされている。しかし、鹿島神宮の祭神がタケミカツチであり、香取神宮の祭神がフツヌシであるとする記述は『古事記』や『日本書紀』には見られず、『古語拾遺』に

既にして、天照大神・高皇産靈尊を崇て養したまひ、降して豊葦原の中国の主と為むと欲す。仍りて、
経津主神（是、磐筒女神の子。今、下総国の香取神是なり。）・武甕槌神（是、甕速日神の子。今、常陸
国の鹿島神是なり。）を遣はして、驅除ひ平定めしむ。

と記載されるのみである。また、香取神宮についての記述はわずかに『日本書紀』第九段第二の一書に見られるのみである。

一書に曰はく、天神、経津主神・武甕槌神を遣して、葦原中国を平定めしむ。時に二の神曰さく、「天に悪しき神有り。名を天津甕星と曰ふ。亦の名は天香香背男。請ふ、先づ此の神を誅ひて、然して後に下りて葦原中国を撥はむ」とまうす。是の時に、斎主の神を斎の大人と号す。此の神、今東国の機取の地に在す。

丸山二郎氏は、鹿島神宮・香取神宮は中臣氏と関係する以前に、物部氏が大和朝廷の先鋒として東国へ進出するにあたり、在地の有力神と関係したことにより成立したものであり、物部氏の没落の後に中臣氏が代わって祭祀を司ったものであると推察された。^{（注2）}更に、右に挙げたような『日本書紀』の記述を見ると、斎の大人がフツヌシであるかのような印象を受けるが、古代は軍の征討の途上で軍を率いるものが神を祀るのが習わしであったことから、この斎の大人はもとは祭祀を司る人に過ぎず、後世に香取神と同一視されたので

はないかと推察されている。また丸山氏は物部氏について以下のように述べておられる。

古来我が国家第一流の閥族として、而もそれが国家の武の家柄であるといふ、物部氏の勢威は大和朝廷の進展と共に、或はその先駆者となつて、若しくはその代表的地位者としても益々増大して行つたことを認めなければならないであらう。

このように、丸山氏は大和朝廷の全国への発展には物部氏の武力が大きく貢献しており、東国に及んだ物部氏の勢威はその地方の豪族や地方神とも次第に関係をつけていったとされる。中臣氏がどのようにしてこの地の神々と結び付いたのか様々な可能性が考えられるものの、もとは物部氏が鹿島・香取の地に勢力を伸ばしていたのであり、物部氏の勢力の失墜によつて、やはり祭祀に関わる家柄であつた中臣氏が、祭祀を交代して行つたものであると推察された。

また、直木氏は、全国に見られる物部郷と「物部」の名を冠する神社などから物部の分布を調べられたが、それによると物部は西国にも広く分布しているが、その分布例は東国の方により多く見られ、物部氏の東国での分布が広範囲にわたることから、物部連の東国での発展は大和朝廷の東国進出に伴つて展開されたのではないかと指摘されている。

丸山氏が鹿島・香取の両神宮を、物部氏と関係のあるものと考えられたのに対し、寺村光晴氏は現地に見られる玉作遺跡の様相から、一つの興味深い見解を示しておられる。^(注4) 寺村氏によれば、鹿島・香取の神は成
立期から並んで奉斎されてはいなかった。仮にこの二神が大和朝廷の東国進出の際に並立、あるいは二社が
一対のものとして奉斎されていたのならば、両神宮は同じ軍事的勢力によつて同時に祀られたものとする

べきである。しかし、まず香取神宮を見ると、『日本書紀』に香取神として記されている斎主の神は先にも述べたようにもともと神を斎き祀る人を意味している。古代においては軍団の主将にあたる人物が戦いの際に司祭者となり神を祀ったことから、この斎主の神は、畿内政権より東国へ進出して来た軍事集団の長だと思われる。これに対し鹿島神宮は、天乃大神社という中央の神と、坂戸社、沼尾社という在地の神の二社を併合しており、香取神宮に比べ在地性が強い。つまり、両神宮の性格には違いが認められるのである。

また、寺村氏は香取神宮の周辺地域に畿内と関連の深い玉作遺跡が多く発見されていることから、その祭祀が畿内との関連が深いことを指摘された。玉は、古来装飾品として、あるいは祭祀用の呪具として使用されており、その祭祀遺跡や製作遺跡を検討することは、古代の祭祀の形態を明らかにする上で有効であると思われるため、ここで玉の変遷について触れておきたい。玉は縄文時代から作られているが、古墳時代の玉について注目するとその変遷は、寺村氏によれば大きく三期に区分される。^(注5)第一期は大体古墳時代の前期にあたる。弥生時代の硬玉製勾玉を中心として碧玉質管玉、碧玉製石製品が作られ、鏡や剣などと共に前期古墳に副葬されている。また、この時期の玉は、装身具としてよりもむしろ呪術的な性格を強く持っているという。第二期は古墳時代中期であり、石製模造品が盛んに作られ、玉の種類や色彩が豊富になる。石製模造品とは、主として古墳や祭祀遺跡から発見される、滑石質材で作られた遺物のことを指す。この時期に祭祀遺跡は全国的に広がって行くが、その形態は前代のものとは異なっている。前代の祭祀は古墳で執り行われたのに対し、第二期における祭祀は、古墳とは分離し、それと同時に祭祀遺跡は全国的に普遍化・統一化されていくという。これは、前期古墳の被葬者である首長が司祭者の性格を持つ王であったのに対し、第二期

になると支配の確立と強化を実現する過程で司祭者の性格が分離され、祭祀のみを司る者が新たに現れたことを示しているとされる。また、この石製模造品の製作遺跡の全国における分布を見ると、日本海側では新潟県と富山県の県境付近や島根県で発見されている。また、福岡県にも石製模造品の遺跡が多く見られるが、これはこの地方に滑石の産出地があるためであると寺村氏は推察されている。さらに、畿内では大阪府で未製品が発見されている。しかし、もともと濃密に分布しているのは関東地方であり、中でも千葉県北部と茨城県南部に集中して見られるという。第三期は古墳時代後期にあたるが、この時期になると、瑪瑙の製品が多く出現するものの玉自体は急速に作られなくなり、祭祀遺跡も減少し、古墳の副葬品としての玉も多彩さを失って、出雲の玉作において製作されるのみになって行くのである。

さて、以上のことを踏まえたうえで、香取神宮の周辺地域を見ると、玉作は第一期にあたる古墳時代前期から開始されているが、同時期には同じ関東地方においては神奈川でも始まっている。ところが、第二期に入ると神奈川の玉作の方は姿を消す。これは、第一期から第二期にかけて大きな政治的変動や勢力の交替があったことを表すと考えられ、寺村氏は畿内政権による東国への進出がその変動をもたらしたのだと推察しておられる。また、香取地方周辺の地域には畿内政権に連結すると思われる石製模造品の製作遺跡や祭祀遺跡が集中していることから、第二期に、この地は畿内政権への隷属によって存続し得たものであるとされた。さらに第二期に製作されるのは石製模造品のみになったが、これらの製作遺跡は香取地方周辺には広範囲にわたっている。ところが、鹿島神宮の所在地である鹿島郡には石製模造品の遺跡が検出されていない。鹿島神宮と香取神宮は利根川をはさんで所在しているが、石製模造品の祭祀遺跡は利根川の南西にあたる千葉県

北部から茨城県の筑波郡を中心に濃密に分布しているのに対し、利根川の北東には全く見られない。つまり、石製模造品に関して、五世紀頃には利根川から霞ヶ浦にかけてを境に、北東部と南西部ではつきりとした違いがあったわけだ。また寺村氏はさらに、この石製模造品の遺跡によって大和政権の勢力の波及を示すことが可能であるならば、利根川を境に北東部は石製模造品の祭祀が行われておらず、五世紀に大和政権の直接的な支配下にはなかったことを示すと指摘しておられるのである。

さて、香取神宮について寺村氏は石製模造品を持つ玉作遺跡や祭祀遺跡の濃密な分布から、大和朝廷から派遣された軍団の長にあたる者が、同時に祭祀の司祭者となり、この司祭者が斎主の神として表されたのではないかと推察された。また、このように香取神宮と政治・軍事との関係が見出だされるならば、香取神宮は大和政権の軍事拠点の役割を果たしたものと考えられ、この地を拠点に活発な行動がなされていたとされる。そして、大和政権の東国進出に際し、香取の周辺地域を確保した氏族として寺村氏は物部氏を想定しておられるのである。さらに、香取の地では、石製模造品は六世紀の後半には消滅するが、これは六世紀末における物部氏の没落と呼応しているとされる。

これまで見て来たような観点から、寺村氏は鹿島神宮・香取神宮の成立を以下のように推察された。鹿島神宮は、大和政権との関係の下に成立していた香取神宮とは異なり、在地の豪族の勢力下にあった。それが物部氏の没落による斎主の交替により、香取神宮の従来の信仰や役割は無視できないものの、これとは別に軍事と祭祀の基地の設定が要求され、鹿島神宮が大和政権の勢力下に入った。そしてこうした過程を経たことによって『古事記』や『日本書紀』には、タケミカヅチとフツヌシが混同されたような形で記載されるこ

とになったのだという。

先にも述べたように丸山氏は、もとは物部氏と深く結び付いていた鹿島神宮・香取神宮の祭祀が、物部氏の没落により中臣氏に移行したと推察された。こうした丸山氏の見解をもとに寺村氏はさらに考察を進め、以前に物部氏と関連を持っていたのは香取神宮のみであると指摘された。このようにフツヌシを祭神とする香取神宮が、大和朝廷との関係から成立したものであり、そこには物部氏が介在していたとするならば、やはりフツヌシは物部氏と深い関わりのある神であると言えるのではないだろうか。

3. フツヌシの神話での役割

次に文献を中心にフツヌシがどのように取り上げられているかを見ながら、物部氏との関わりについて考えてみたい。フツヌシとタケミカヅチの取り上げ方については先にも述べたが、『古事記』と『日本書紀』に相違が見られる。まず、両神の誕生について見たい。『日本書紀』には両神とも登場するが、『古事記』に登場するのはタケミカヅチのみであり、フツヌシの名は見られない。

『古事記』

ここにその御刀の前に著ける血、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、石柝の神。次に根柝の神。次に石筒の男の神。次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、甕速日の神。次に樋速日の神。次に建御雷の男の神。またの名は建布都の神、またの名は豊布都の神。三神。次

に御刀の手上に集まる血、手俣より漏き出て成りませる神の名は、闇滌加美の神。次に闇御津羽の神。

『日本書紀』第五段第六の一書

復剣の刃より垂る血、是、天安河辺に所在る五百箇磐石と為る。即ち此経津主神の祖なり。復剣の鐔より垂る血、激越きて神と為る。号けて甕速日神と曰す。次に燂速日神。其の甕速日神は、是武甕槌神の祖なり。亦曰はく、甕速日命。次に燂速日命。次に武甕槌神。復剣の鋒より垂る血、激越きて神と為る。号けて磐裂神と曰す。次に根裂神。次に磐筒男命。一に云はく、磐筒男命及び磐筒女命といふ。復剣の頭より垂る血、激越きて神と為る。号けて闇霧と曰す。次に闇山祇。次に闇岡象。

第七の一書

又曰はく、軻遇突智を斬る時に、其の血激越きて、天八十河中に所在る五百箇磐石を染む。因りて化成る神を、号けて磐裂神と曰す。次に根裂神、児磐筒男神。次に磐筒女神、児経津主神。

次に、国譲りの記述においては、『古事記』ではタケミカヅチとアメノトリフネが、『日本書紀』ではフツヌシとタケミカヅチが葦原の中つ国に派遣されており、殊に『日本書紀』ではフツヌシの方が主神であり、タケミカヅチの方が従神であるような記述が見られる。

第九段本文

是の後に、高皇産靈尊、さらに諸神を会へて、当に葦原中国に遣すべき者を選ぶ。僉曰さく、「磐裂（磐裂、此をば以簸娑婁と云ふ。）根裂神の子磐筒男・磐筒女が生める子経津（経津、此をば賦都と云ふ。）主神、是佳けむ」とまうす。時に、天石窟に住む神、稜威雄走神の子甕速日神、甕速日神の子燂

速日神、熯速日神の子武甕槌神有す。此の神進みて曰さく、「豈唯経津主神のみ大夫にして、吾は大夫にあらずや」とまうす。其の辞氣慷慨し。故、以て即ち、経津主神に配へて、葦原中国を平けしむ。

第一の一書

故、天照大神、復武甕槌神及び経津主神を遣して、先づ行きて駈除はしむ。

第二の一書

一書に曰く、天神、経津主神・武甕槌神を遣して、葦原中国を平定めしむ。

まず本文によれば、本来はフツヌシのみが葦原の中つ国平定に派遣されるはずであったのだが、これにタケミカヅチが割つて入つたような形になっている。次に第九段第二の一書ではこの後、オホナムチが二神を怪しむが、フツヌシがこれをタカミムスヒに報告し、再び二神が派遣されてタカミムスヒの鄭重な言葉を伝えたことにより、オホナムチは国譲りに同意している。さらにその後、フツヌシのみの事跡として「岐神を以て郷導として、周流きつつ削平ぐ。逆命者有るをば、即ち加斬戮す。帰順ふ者をば、仍りて加褒美む。」と記されている。このように、『日本書紀』には、フツヌシが葦原の中つ国平定の主神であるかのような記述が多く見られる。

更に先にも述べたように、国譲り神話については、神武天皇の東征の条でも語られている。『古事記』では、熊野に入った神武天皇一行が、草木の中から現れて消えた熊を見て氣を失った。この時熊野の高倉下という者が一振りの大刀を天皇に奉ると、天皇は目覚めて起き上がり、「よく寝たことだ」と言つてその大刀を受け取った。すると悪い神が切り倒され、一行が皆目覚めたとされる。この時高倉下は以下のように述べ

ている。

「おのが夢に云はく、『天照らす大神・高木の神二柱の神の命もちて、建御雷の神を召びて詔りたまはく、葦原の中つ国はいたく騒ぎてありなり。我が御子たち不平みますらし。その葦原の中つ国は、もはら汝が言向けつる国なり。かれ汝建御雷の神降らさね』とのりたまひき。ここに答へまをさく、『僕降らずとも、もはらその国を平けし横刀あれば、この刀を降さむ。（この刀の名は佐土布都の神といふ。またの名は甕布都の神といふ。またの名は布都の御魂。この刀は石上の神宮に坐す。）この刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、そこより墮し入れむ。かれ朝目吉く汝取り持ちて天つ神の御子に献れ』と、のりたまひき。かれ夢の教のまにま、且におのが倉を見しかば、信に横刀ありき。かれこの横刀をもちて献らくのみ」

この経緯は、『日本書紀』ではいくらかの相違があるが、そこに登場する神名は共通している。先にも述べたがフツノミタマとは、物部氏の奉斎する石上神宮の御神体である。また、この高倉下という人物の素性について記紀には記されていないが、『先代旧事本紀』の天孫本紀によればニギハヤヒの子である天香語山命のまたの名であり、物部氏の一族である尾張連の祖とされている。このことから、国譲り神話は本来物部氏との深い関わりの中で語られていたものと想定することが出来る。

では、先にも述べたように物部氏と関係深いのはタケミカヅチではなくフツヌシであるとするならば、なぜこの神武天皇条において、フツヌシではなくタケミカヅチのみが命を受けて神剣を降下させているのだろうか。

これについて吉井巖氏は、葦原の中つ国への神劍降下の伝承は、神劍による葦原の中つ国平定の神話を踏まえて作られたため、神劍の降下の方に重きを置くのが古い形であったが、これにタケミカヅチが活躍する伝承が新たに関与するに至ったものであると指摘されている。^(注6)更に吉井氏は、葦原の中つ国平定の使者と派遣を命令する者との関係を『古事記』と『日本書紀』で比較され、タカミムスヒが命令者の場合はフツヌシのみか、またはフツヌシが主神でタケミカヅチが従神として登場し、アマテラスが命令者の場合はタケミカヅチのみか、タケミカヅチ・フツヌシが並んで登場することから、タケミカヅチとアマテラス、フツヌシとタカミムスヒという組み合わせが想定出来ると述べられた。また、ホノニギの降臨を命ずる神がタカミムスヒからアマテラスへと代わったとする三品彰英氏の指摘を支持する立ち場から、タケミカヅチはアマテラスと結び付くことによって新しくこの伝承に加えられた神であつて、もともとはタカミムスヒと共に登場するフツヌシがこの伝承の初めの姿と結び付く神であつたと指摘されている。

以上のように文献からも、国譲り神話が物部氏との関係が深いことと、この神話がもともとタケミカヅチではなくフツヌシを主役として登場させていたと思われることから、フツヌシと物部氏とは結び付くのである。また、崇神天皇条には、天皇はオホモノヌシの託宣によりオホタタネコにオホモノヌシを祀らせ、更に物部のイカガシコヲに天の八十平瓮を作つて天つ神地つ神の社を定めさせたとする記述がある。『古事記』ではオホタタネコは「僕は大物主の大神、陶津耳の命が女、活玉依毗売に娶ひて生みませる子、名は櫛御方の命の子、飯肩巢見の命の子、建甕槌の命の子、僕意富多多泥古」と言つて自分がタケミカヅチの子であると名乗っている。しかし、『日本書紀』では、オホタタネコはオホモノヌシとイクタマヨリビメの娘とされ

ている。先程の吉井氏の指摘から考えると、『古事記』におけるオホタタネコとタケミカツチの関係もまた、後に加えられたと言えるだろう。

4. 出雲を媒介としたフツヌシと物部氏

さて、国譲りの舞台は出雲であるが、実際の出雲国でも、フツヌシは信奉されていたと思われる。『出雲国風土記』にはフツヌシに関する記述がいくつも見られる。

・布都努志命、天石楯縫ひ直し給ひき。故、楯縫と云ふ。(意宇郡楯縫郷)
・布都努志命、国廻り坐しし時、此処に来坐して詔りたまひしく、「是の土は、止まなくに見が欲し」と詔りたまひき。故、山国と云ふ(意宇郡山国郷)

・和加布都努志能命、御狩し坐しし時、この郷の西の山に狩人を立て給ひて、猪羆を追ひて北の方に上りたまふに、阿内の谷に至りて、その猪の跡亡失せき。爾の時詔りたまひしく、「自然なるかも、猪の跡亡失せぬ」と詔りたまひき。故、内野と云ふ。(秋鹿郡大野郷)

・所造天下大神の御子、和加布都努志命、天地初めて判れし後、天御領田の長と供へ奉り坐しき。即ち彼の神、郷の中に坐せり。故、三太三と云ふ。(出雲郡美談郷)

このうち、出雲郡美談郷においてはフツヌシはオホナムチの子とされているが、これは松前健氏によれば、フツヌシの崇拜は出雲に定着した時期がかなり古いため、オホナムチの崇拜に包摂されてしまったもので

ある。^{〔注〕} 実際に出雲には弥生時代の最終末から古墳時代の初め頃のものと思われる近畿地方の特徴を持つ土器が出土しており、^{〔注〕} 四世紀にはすでに畿内との交流が行われていたと言える。一方、物部氏もやはり出雲との関わりが深く、文献においても、物部氏はたびたび出雲へ神宝の検校に赴いている。

出雲は全国で最も大規模に、また長期的に玉作が行われていた地域である。寺村光晴氏は、出雲の玉作でも第二期にあたる古墳時代中期に石製模造品が生産されていることなどから、出雲の玉作にもやはり物部氏が深く関わっていることを指摘されている。^{〔注〕} また、斐伊川の支流である赤川沿いの玉作遺跡はこの第二期のものであり、赤川の少し下流には古墳時代初期の神原神社古墳がある。この古墳は方墳であり、景初三年の銘を持つ三角縁神獣鏡や、大刀、剣、鉄鏃、斧、鍬などの多数の鉄器が副葬されていることから、大和や吉備との密接なつながりが認められる。つまりこの辺りの地域は、第二期の玉作遺跡や神原神社古墳の様相から、出雲の中でも殊に物部氏との関わりが深い土地であると思われるのである。

さて、神原神社の祭神はイハツツヲ・イハツツメであり『日本書紀』の一書によれば、この二神はフツヌシの親とされる。一七〇八年（宝永五年）の神原神社縁起によると、イハツツヲ・イハツツメはアマテラスの命により、神宝を司るために神原神社に降臨した。さらにこの地は『出雲国風土記』では神原郷にあたり、オホナムチが宝を積み置いた所とされている。物部氏が出雲の神宝を検校し、管理したという記紀の記述からも、神原神社と物部氏とのつながりは見出だされる。つまり、この神原神社を通じて、フツヌシと物部氏との深い関わりが考えられるのではないだろうか。

おわりに

これまで東国や出雲における玉作遺跡や文献などから、物部氏とフツヌシとの関係について探ったところ、フツヌシはもとは物部氏と関係を持っていたものが、物部氏の没落とともにその祭祀が中臣氏に移行したものと考えられるに至った。大和朝廷の勢力の波及、つまりその先鋒となった物部氏の足跡を示すとも言える石製模造品及びその製作遺跡は、関東地方の利根川南西の地域に集中しており、出雲においては物部氏関わっていたと思われる第二期の玉作遺跡が斐伊川支流の赤川沿いから検出されている。そして、これらの地にはフツヌシとの関わりの深い香取神宮及び神原神社が存在していることから、フツヌシと物部氏とのつながりが明瞭に想定できると思われる。このように、国譲りの中でフツヌシがもとも果たしていた神話的役割は、出雲をはじめ全国への進出において物部氏が大和勢力の先鋒として果たした歴史的役割を明らかに反映していると思われるのである。

注

- (1) 直木孝次郎『日本の歴史2 古代国家の成立』中公文庫 一九六八年 二六頁
- (2) 丸山二郎『日本古代史研究』大八洲出版 一九四七年 「中臣氏と鹿島香取の神」 九三頁～一四三頁
- (3) 直木孝次郎『日本古代兵制史の研究』吉川弘文館 一九六八年 一四七頁～一五二頁

- (4) 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 一九八〇年 第五章四「香取・鹿島の神と石製模造品製作遺跡」四二二～四三五頁
- (5) 寺村光晴 前掲書 第一章二「玉の性格と変遷」(五一頁～五六頁)、総括三「古墳時代の玉作」五〇二頁～五二二頁
- (6) 吉井敏『国語と国文学』八 一九七二年 五七頁～五八頁
- (7) 松前健『日本神話の形成』塙書房 一九七〇年 二〇二頁
- (8) 島根県教育委員会・朝日新聞社編集『古代出雲文化展』一九九七年 丹羽野裕「迫りくるヤマト」七九頁
- (9) 寺村光晴 前掲書 第三章三「出雲国玉作の系譜」二二九頁～二六四頁

The study concerning relation between the myths of Futsunushi and the Mononobe clan

Naoko, Murayama

According to a myth, the Central Land of the Reed Plains was mainly conquered by Futsunushi and Takemikazuchi. Both of them are generally considered to be worshipped by the Nakatomi clan. But in my opinion, Futsunushi originally had a close relation to the Mononobe clan, charged with military and religious affairs. It appears that the Nakatomi clan linked itself to Futsunushi in place of the Mononobe clan after the downfall of the latter.

Takemikazuchi is enshrined in Kashima shrine in Ibaragi Prefecture, and Futsunushi is enshrined in Katori shrine in Chiba Prefecture. In the area around Katori shrine, there are many sites of bead making in the middle of the Kofun period, and in those sites quite many imitation beads made of stone were excavated that represent the power of the Yamato regime, whereas in the area around Kashima shrine no site like these has been found. So it is likely that

Katori shrine was an important strategic point when the Yamato regime extended its power to the eastern land. On the other hand, the Mononobe clan played an important part in Yamato army. These facts show that there is a close relation between Futsunushi and the Mononobe clan. Besides, Futsunushi led the conquest of the Central Land of the Reed Plains in the myth of the Nihonshoki, whereas Takemikazuchi plays there a subordinative part. It appears that at first this myth narrated exclusively Futsunushi's deed, and Takemikazuchi's role was added to it later.

Izumo region which is the scene of this myth has a close relation to the Mononobe clan, and Futsunushi was worshipped in Izumo from ancient times. There is a shrine named Kanbara near the place where a site of bead making in the middle of the Kofun period was discovered, and Iwatsutsuwo and iwatsutsume who are Futsunushi's parents are enshrined there. Thus Katori shrine and Kanbara shrine which are dedicated to Futsunushi and his parents are located in the area where the sites of bead making which verify the controle of the Mononobe clan exist. As a result of these analyses I conclude that there is an intimate connection between Futsunushi and the Mononobe clan.

(人文科学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程)